

事業間連携作業の推進について

南木曾・経営課専門官 山田 典
事業課 “ 西 秀 夫

はじめに

経営改善を着実に推進するには、各事業間の適切な労務の連携が重要な要素であることは、いうまでもない。

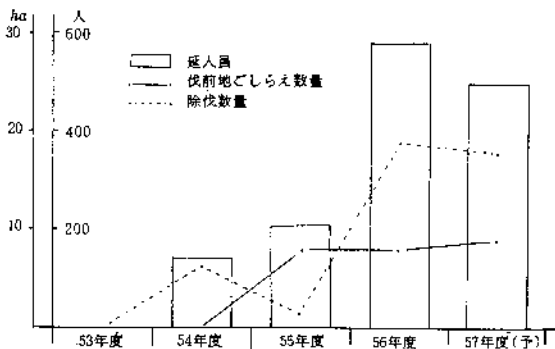
当署の業務方針の大きな柱として、事業運営の効率化、労働安全性の確保があり、その方針に沿って、目的達成のため、業務の遂行に努力しているが、作業を実行する現地は、年々奥地化し、下層植生は、かん木、雑草地帯から、ササ生地に變化し、従来の作業方法や、作業仕組では、能率の向上は望めない状態にある。

このため、ササ生地を対象として、製品、造林の事業間連携を推進して、能率性の向上、作業の安全性の確保、職努意欲の向上等を目指して実施したものである。

1 実施経過

当署の製品から、造林への連携作業は、54年度から開始されたが、55年度以前は延人員も少なく、

図-1 流動化の推移



56年度以降は、55年度以前に比較して、約2倍以上の延人員となっている。また、57年度が56年度に比較して低いのは、57年度に製品においてセットの再編成を実施したためである。実施した連携組合せ作業は、造林では、伐前地ごしらえと除伐作業であって、このうち、除伐作業は56年度から激増となっている。伐前地ごしらえは漸増であったが、今日は、事業間の組合せによる除伐作業は対象外として、同一作業班による伐前地ごしらえから更新までの一貫作業を対象として調査を実施した。

1 実施方所の概要

(1) 所在地

南園国有林 645 林班

- (2) 林令
74年
- (3) 蓄積
ha 当たり 252 m³
1 本当たり 0.29 m³
- (4) 平均傾斜
19度
- (5) 平均標高
1230m
- (6) 方位
NE
- (7) 面積
2.23 ha

2 作業方法と実施概要

大山製品事業所からの流動受けによって、伐前地ごしらえを実行し、その後、林木の伐採、搬出をした。地ごしらえ方法は人力で全刈地ごしらえを実行した。

II 実行結果

連携方法と立地条件の同一なカ所を選定し比較すると、延人員では、地ごしらえは従来方式は1回、

表-1 従来方式と連携方式との比較表

| 工 程 | 数 量 | 従 来 方 式 | | 連 携 方 式 | | 差 | | 備 考 |
|---------|-------------------|--------------------|-------|--------------------|-------|--------------------|------|----------------|
| | | 功 程 | 延人員 | 功 程 | 延人員 | 功 程 | 延人員 | |
| リモコン伐倒 | 618m ³ | 5.01m ³ | 123人 | 5.50m ³ | 112人 | 0.49m ³ | 11人 | |
| 集材作業 | 618 | 2.19 " | 282 " | 2.52 " | 245 " | 0.33 " | 37人 | |
| 小 計 | | 1.52 " | 405 " | 1.73 " | 357 " | 0.21 " | 48 " | 製品事業 12%アップ |
| 地ごしらえ作業 | 2.23ha | 24.6人 | 55 " | 26.9人 | 60 " | 2.3人 | 5 " | 造林事業 9%ダウン |
| 小 計 | | | | | | | | |
| 計 | | | 460人 | | 417人 | | 43 " | 9%アップ |

連携方式では伐前と整理地ごしらえを2回実施したために増となっている以外は連携方式が低い。このなかで、リモコン伐倒と地ごしらえ作業では両方式による差は僅かであるが、集材作業で大きくこれがトータルに影響している。

製品事業における能率性の経緯は、全体生産性では向上を示し、相対生産性では、事業所タイプ区分が52のDタイプであったのが、90のBタイプにランクされて能率性も大きく向上している。

以上のことから、事業間連携による利点は、

1 能率性の向上

伐採から、地ごしらえまで製品事業では、12%の向上ができたが、造林事業では9%のかなり増しとなり、トータルで9%の向上が得られた。

表-2 能率性の経緯

| 年度 | 54 | 55 | 56 | 57(予) | 備 考 |
|-------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-----|
| 林内生産性 | 1.23m ³ | 1.67m ³ | 1.90m ³ | 1.91m ³ | |
| 全体生産性 | 0.70 " | 0.81 " | 0.89 " | 1.00 " | |
| 相対生産性 | 52 | 81 | 90 | 90 | |

2 安全性の確保

(1) 林内の障害物の除去による災害防止林地のササ、かん木が伐前地ごしらえによって刈払われた関係上、視界が広がり、周囲の状況が良くわかり、このため、伐倒方向の確認や、枝葉のハネカエリによる災害の防止ができた。

(2) 伐倒にあたっての退避のスムーズな実行

林地のなかの歩行が伐前地ごしらえを実行したため容易になり、転倒、伐倒の際の退避がスムーズに行われるようになった。

3 多能的意欲の向上

製品は製品、造林は造林という、セクト主義的意識が弱まり、山の作業は、どんなことでもやる意欲が作業を実行している人にみられるようになった。

III 考 察

連携作業を、なお、一層効率的に実施するために、次のことがあげられる。

1 作業方法の改善と林地除草剤の導入

全刈地ごしらえから、筋刈地ごしらえに作業方法を変更し、除草剤を併用することにより、なお一層の省力化を図る。

2 事業の計画的実行

製品事業の進捗状況による影響が、整理地ごしらえの実行に、また、更新にも影響するため、各主任の間で打合せを実施して作業の延期を極力さけるように努める。

3 研修の実施

技能の向上と知識の習得をはかるため、効率的な研修を実施して、他事業の作業の技術的知識を得ることが必要である。

おわりに

製品事業から、造林事業への流動化は、今後増加する傾向にあるが、安全作業と能率性の向上を目的とした連携作業の拡大をはかることが必要で、除伐作業、カモンカ防護柵の新設と修理、歩道作設と修理を押し進める必要がある。